



愛郷無限

2016年05月16日号 NO.0544

写真提供:大山市

土屋館
どや
だて 通信

発行者：大曲・花火通り商店街
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035
tuck-t@akita-tsujiya.jp

Subject：利他と利己 池澤夏樹さんの想い

ちょっと前ですが、日経新聞3月1日の朝刊に、作家の池澤夏樹さんが東日本震災から5年目の特集「問いかける言葉」に寄稿されていて、その内容が胸に刺さり、以来しばらく色々と考えておりました。

東日本大震災の後、日本には怨(じよ)の心が溢れました。利己を押さえ、利他のために自分の時間と財産と労力を惜しみなく分け与える。そんな雰囲気(きふき)に世の中が包まれました。各々の立場で出来ることを考え、ある者は実行し、あるものは誰かに託し、それさえ出来ぬ者は祈る。そして他人の心の痛みを己の痛み(いたみ)に感じ、心寄り添(よ)う姿(すがた)がたくさん見られました。

しかし5年を経て、被害のなかった私たちを含む大方の日本人は東日本震災を一昔前(いそ)のような感覚(かんかく)で記憶(きおく)からほとんど葬(くわ)り去(い)っているようです。

怨(うらみ)を取り戻(もど)すどころか、政治(せいじ)でも経済(けいぎ)でも芸能(げいぎ)でも日々(にっぴ)の暮らし(らし)でも、怨(うらみ)の心(こころ)とは全く正(ただ)反対(はんたい)に、他者(たが)に対するバッシング(ばしんぐ)や炎上(えんじやう)といった過剰(かじょう)で自分勝手(じぶんがって)な反応(はんおう)がメディア(メディア)に溢(あふ)れる頻度(ひんどう)と量(りやう)は、以前(いぜん)よりも幾数(いくすう)倍(ばい)増(ぞう)したのではないかと思(おも)えるほど(ほど)です。

寛容(くわんよう)さ(さ) (トランス) (トランス) のかけら(かけら)も見(み)えない。

池澤(いけ)さんが仰(おほ)るとおり、311(さんいちいち)を機(き)に何(なに)かが変(か)わる、忘(わす)れ・眠(ね)っていたDNA(ディーエヌエー)が見事(みごと)に姿(すがた)を現(あらわ)し、地域(ちいき)やご縁(ごえん)を尊(たも)つ尊重(そんじゆう)する動(うご)きが加(か)速(そく)される、私(わたし)もそんな期(き)待(たい)を持(も)った者(もの)の一人(ひとり)でした。もちろん、これ(これ)だけ複(くわ)雑(ざつ)にな(な)ってしま(しま)った世(よ)の中(なか)で、全(ぜん)てが180度(いちひゃちじゅうど)一(いち)気(き)に変(か)わ(わ)ってしま(しま)うとい(い)うこと(こと)はな(な)いであ(であ)るでしょう(しょう)が、でも何(なに)かの切(き)っ掛(か)けにはな(な)るはず(はず)だと思(おも)っていま(いま)した。しかし私(わたし)たちが日(にっ)常(じょう)で感(かん)ずるところ(ところ)の99%(きゅうじゅうじゅう)は変(か)わ(わ)ってない(ない)ですよ(よね)。

映画監督(えいがかんとく)の羽仁進(はにすすむ)さんは、これまでキリスト(きりすと)が生ま(う)れた日(ひ)を境(さかい)に、紀元前(きげんぜん)・紀元後(きげんご)と分(わ)けていた西(せい)暦(れき)・世界史(せかいし)を、ヒトラー(ヒットラー)のユダヤ人(よだやじん)虐殺(ごつがく)を境(さかい)に改(か)めるべき(べき)だとい(い)いました。ヒトラー(ヒットラー)とナチス(ナチス)の蛮行(ばんぎやう)をそれ(それ)ほど深(ふか)く歴史(れきし)と記憶(きおく)と身(み)体(たい)に刻(き)み込(こ)まねば、愚(おろ)かな人間(にんげん)とい(い)うもの(もの)は、忘(わす)れた頃(ころ)にまたしよ(しよ)もないこと(こと)を繰(くり)返(かえ)すはず(はず)だからと。

災害(さいがい)慣(な)れ(れ)した日本(にっぽん)ではある(ある)もの(もの)の、東日本大震災(とうにっぽんおほいしな)と福島第一(ふくしまだいいち)原発(げんぱつ)は、私(わたし)たち(たち)にと(と)って同(どう)じく(く)ら(ら)い刻(き)まね(ね)ばならぬ(らぬ)大(だい)事(じ)ではな(な)か(か)ったか(か)？

池澤(いけ)さんがコ(こ)ラム(らむ)中(ちゆう)で鋭(えい)く突(つ)か(か)れた、日本(にっぽん)人(じん)の中(なか)にもと(もと)も(も)とある(ある)、私(わたし)たち(たち)の中(なか)にもと(もと)も(も)とある(ある)二面性(にめんせい)。その両面(りやうめん)を認(め)めつ(つ)つも、311(さんいちいち)から5年(ごねん)後(ご)の今(いま)の状(じやう)況(きやう)を悲(かな)観(かん)し、もど(もど)かし(し)さ(さ)を感(かん)じ、「社(しゃ)会(かい)をよ(よ)り良(よ)くし(し)たい(たい)とい(い)うあ(あ)の雰(ふん)囲(い)気(き)は災(さい)害(がい)時(じ)だ(だ)け(け)のユ(ユ)ートピア(とぴあ)幻(まぼろ)想(そう)だ(だ)った(った)のか(か)？」 と口(くち)にする(する)ほど(ほど)、厳(げん)しい想(おも)い(い)を発(はつ)して(して)いま(いま)す。

たしか(たしか)にその通(とお)り。でも私(わたし)はそ(そ)うであ(であ)って(って)も絶(ぜつ)望(ぼう)はし(し)たく(たく)ない(ない)。あ(あ)き(き)らめ(め)たく(たく)は(は)ない(ない)。311(さんいちいち)の時(とき)の想(おも)い(い)を忘(わす)れ(れ)ず(ず)、凡(ぼん)夫(ぷ)に出来(でき)る(る)こと(こと)を信(しん)じて(じて)肅(さく)々(さく)と続(つづ)けて(けて)い(い)く(く)のみ(のみ)です(す)。

問いかける言葉

東日本大震災5年

▷2◁

震災時、仙台に叔母が暮そこに関心が向いている。らしていた縁があり、東北には何度も足を運んだ。が、れきの山の中を歩いてきたとき、情けなくて涙が出てきた。日本人はなぜこんなところで暮らしているのだろう、と。

日本は温帯モンスーン地帯にあり、なおかつ地球を覆う複数のプレートの衝突地点にある。台風や地震、津波に際限なく痛めつけられ続けるという宿命は、どんな人間を作ったのか。今

編者を一人で務める日本文学全集を刊行中だ。その編集を通じ「日本人とは何者か」を考えているという。

「古事記」から「平家物語」、「曾根崎心中」、そ

作家 池澤 夏樹氏



いけざわ・なつき 1945年北海道生まれ。著書に「双頭の船」「砂浜に坐り込んだ船」など。

利他に向かう社会幻想か

「だが、今なお私たちの精神の基底にはそうした心性が息づいている。同時に、日本人は天災と復興を繰り返す長い歴史の中で「災害ずれ」してしまっただ人間だとも思う。災厄に見舞われても「仕方がない

震災直後はボランティアなどの利他的な動きが社会に広がり、店舗や地下鉄の駅が多少暗くてもいいと多くの人が思っていた。原発に依存するのはもうやめようという声も強かった。これを機に世の中が変わるの

にもどかしさを覚えていなか。あれだけの犠牲を出した先の戦争のあと、日本には民主主義が根づいた。震災からも禍福を入れ替える発想が出てくるかと思っが、残念ながら今までのころ、そこはなっていない。お金や経済以外の原理も少しは力を持つかと期待したが、何が変わったという感じはしない。何と云っても原発が再稼働している。今の状況のまま5年のライオンを越えてしまっているかと思う。ポルトガルの首都を襲った。おびただしい犠牲者を出した1755年のリスボ

ではないかという思いがあったが、結局、すべて元に戻ってしまったように私には見える。社会をよりよくしたいというあの雰囲気は、結局、災害時だけのユートピア幻想にすぎなかったのか。変わっていかない社会

ん地震は、欧州の人々の考え方にも大きな影響を与えた。フランスの思想家ヴォルテールは「この世のすべては善である」とする(当然のキリスト教社会の)世に、私たちが生きている震後の社会から生まれるものは、いくつかの選択肢があるときに人間は必ず最善の道を選ぶ、という悲観論なのだろうか。

震災は人間の良き面と悪しき面をともにあらわにする経験だった。毎年3月11日だけでは足りない。私たちは折々にあの日に立ち返るべきものを考えなければならぬと思う。